

⑤1 力持ちの大長兵衛

まだ百姓もちよんまげゆつたころの話やで。

小坂（河和田町）の三九郎さんのうちに長兵衛さんちゆう若者がいた。それはそれは力持ちの大男での。みんなから「大長兵衛」つて呼ばれてたんや。

ある日、尾花の殿上山までたき木取りに行ったら、谷川に平べつたい大石がごろがっていた。

「いいもんみつけたぞ、田んぼ道の川の橋にしてやろう。みんなも助かるやろ。」

と思うての、七十そくのたき木にはさんで、何百キロもある大石をかついで帰ってきたといの。さすがの大男もこんだけかついできたんや、うしろから見ると頭もなんも見えん。ちっこい山が動いてる

昭和46年ごろまで
能村与志雄さんの家の前の川にかかっていた石橋。
いまは敷山神社の前にある。
おとなが一人寝られる大きさだ。

大長兵衛の石

みたいやつたと。

大長兵衛はやさしゆうて、よう働くんやけど、一つだけ困ることがあった。食べるったら食べるんや。いろいろにかけると一番いけえ八升なべ。あのなべいっばいの雑炊を見てるまに平らげた。そのあと、もちを七十個食べたこともあるもんで、うちは貧乏になつてしもた。

「もうどもならん。おまえ、どっかよその土地に行つておくれ。」

おつかさん泣き泣きたのんだんやと。

家を出た大長兵衛、とうとう琵琶湖が見えるところに来た。

お宮の前に出たら人だかりがしてたもんで、上からのぞくと、

欄干の上のせる大きな石の擬宝珠が持ちあがらんで、みんなため息ついている。

「俺がのせてやろう。」って言うなり、大長兵衛、らへらへくと擬宝珠をかかえあげた。

「ひやあ、あんさんほんに力持ちやねえ。おおきにありがとさん。そやけどこれ反対むぎですわ。」



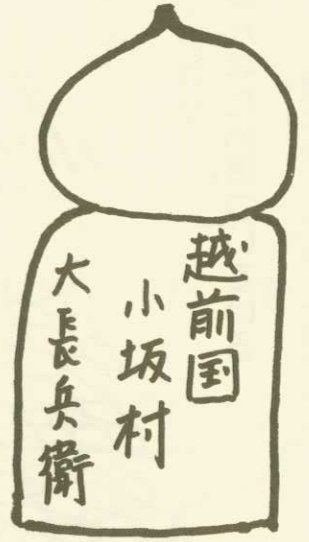
「この石におれの名前をきざんでくれるか。そしたら正面むけてやるけど。」

「お安いご用や。ちよっと待ってくんははれ。」

大長兵衛、自分の名前きざんでもろい、

「ほいきた。これでどうじゃ。」と、正面に向けな

おしてやったと。



⑤2 カップパとれんげ草

ごんだけ昔のことやろか。小坂の畑でおいさんが草取りしてるこの、子供に化けたカップパが、

「おいさん、ほくと水あびしようよ。」と、さそったんや。

「この草取りがすんだらな。」とどうたら、草取りを手伝ってくれたんやと。

おいさん、この子がカップパとわかったんで、「おう、えらかった。手伝ってくれて早うすんだ

わい、おおきこの。」

と、頭をなでながら皿の水をとってしもたんやと。皿の水がないとカップパは何もできん。弱いも

んやで、おいさん、

「お前が、また人をだましてわるさをするなら、今いっしょにしまっせ。」とびになった。びっくり

したのはカップパ。

「もう二度と出てきません。」と、地面に手をつい

て、あやまった。おいさん、

「そんなら、出てこん証拠でもあるんか。」と聞いた。

「はい、カップパはれんげ草の咲くところには出ます。

けど咲かんとこには出ません。」というた。

それから小坂には、れんげ草が咲かなんだんやと。

